Osaka University Knowledge Archive

Title	3. 東海地域で取り組んだことと取り組んでいること
Author(s)	小島, 祥美
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 53-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48251
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Ⅱ
取り組み事例と課題の共有

3. 東海地域で取り組んだことと取り組んでいること

小島祥美　愛知淑徳大学文学部准教授

小島祥美　お招きいただきましてありがとうございます。私は大阪外大卒業生で、かつこちら大阪大学大学院の卒業生でもあるということもありまして、きょうは本プログラム企画者であり主催者である後輩たちにエールを送るつもりで参りました。

私は短大卒業後、小学校に赴任しました。そのときに東南アジアや南米にルーツを持つ外国人児童と初めて出会いました。1994年なので今から17年ぐらい前になりますけれども、そうした子どもたちとの出会いが大きな転機になりました。当時の私は言葉をはじめ、その子どもたちの背景も全く知りませんでした。すぐに本屋に行ってその子どもたちの言語の辞書を買って、身ぶり手ぶりでのコミュニケーションです。多分今も結構動作が激しかったりするかと思うのですけれども、もう本当に身ぶり手ぶりで子どもたちとコミュニケーションをとるというところから始まりました。とりわけ、自転車で子どもたちの家を回って家庭訪問しながら、コミュニケーションを図ることをしていました。

外国人児童のなかにはベトナム難民の子どもがいました。その児童に、ベトちゃんドクちゃんという話をしたら、彼は「知らない」といい、「ベトちゃんドクちゃんは知らないけれども、そんな子がたくさんいた」と、小学2年生のラム君が私に言うのです。すごいショックでした。また小3のアレサンドロウ君からは、ブラジルの移民とその歴史について教えてもらいました。

こんな状況でしたので、この子どもたちに「先生」と言われている自分が大変情けなくなりまして、この子たちの国に行ってもっと外国人児童たちの背景を知りたいと思うようになりました。そして受験勉強をはじめて大阪外国語大学の夜間主コースに合格し、それを契機に大阪に転居してきました。

大阪に引っ越してきてからは、箕面市内に1年暮らしていたときに、天満駅近くにある関西テレビの裏側に大阪学生留学生会館という建物を内外学生センターが改装しました。留学生専用の宿舎ですが、日本人学生のチューターを募集していることを知り、すぐそちらのほうに応募しまして、留学生との共同生活をしながら日本に暮らす外国人住民と多文化共生を考えるという生活をしました。

外大入学後の1996年から、阪神淡路大震災で被災された外国人住民支援活動に参加し

小島祥美

1994年公立小学校教員時に外国人児童との出会いから、南米一人旅へ。帰国後は、神戸市内で外国人住民の支援にかかわる活動（NPO法人たかとりコミュコミュニティセンター内、事務局長）やコミュニティビジネス（NPO法人多言語センター FACIL）に参画。こうした活動のなかで、学校に通ってない不就学の外国人の子どもと出会い、不就学の問題を初めて知り、現状を変えたいと強く決意する。
2003年4月から岐阜県可児市へ転居し、全家庭訪問調査による外国人の子どもの就学実態調査に行政・民間団体等と協働して挑む。全国で初めて外国人の就学実態を明らかにしたことから、2006年4月より可児市教育委員会の初代外国人児童生徒コーデョネーターに抜擢され、不就学ゼロをめざした施策を地域と連携して実践活動を行う。
2006年9月に愛知淑徳大学教員として着任し、2011年4月より現職。
2006年3月に大阪大学大学院にて博士号（人間科学）取得。
愛知県小牧市多文化共生協議会委員（委員長）、愛知県地域振興部委嘱「プレスクール実施マニュアル検討会議」委員（コーディネーター）、NPO法人可児市国際交流協会理事（兼運営委員）なども務める。

ました。私は神戸市長田区にある鷹取という地域で始まった活動に参加しました。大阪外国語大学を選択したのも、そうした理由がありました。

活動を続けるなかで1998年頃、神戸市内で学校に行ってない外国人の子どもと出会いました。神戸でのボランティア活動では行政と私たちNGOとの間で大変風通しのいい関係でしたが、就学の話になるとなかなか行政と対話ができないという経験をしました。

この神戸市内で学校に行っている外国人の子どもの人数を教えてほしいと神戸市教育委員会に質問しました。そうしたら回答が、「わからない」と。「ええっ、神戸市に何人外国人の子どもが住んでいて何人学校に行っているか神戸市はわからないの～?」と、本当に驚きました。兵庫県も大阪府も回答は同じでした。そして文部科学省にも問い合わせましたが、同じ回答でした。つまり、外国人の子どもは就学義務の対象ではないことにより、学校に行っている子どもさえも実態は把握されていなかったのです。ですので、学校に行ってない子どもについてはまったくわからない状況だったのです。

日本語指導が必要な児童生徒の状況については各自治体で把握されていました。というのも、1990年に入管法が改正されたのは皆さんご存知ですよね。それに合わせて、91年から当時の文部省では日本語指導が必要な児童生徒を把握する調査を開始します。日本語が分からない児童生徒の増加により、一つの学校で10人以上日本語指導が必要な児童生徒が在籍する場合については加配教員が配置されるという緊急措置が開始されました。都道府県、市町村によって加配教員の配置の条件等は異なり、近年は特に条件が変化していますが、そうした対応が当時ありました。

こうした状況を知り、外国人の子どもの教育権について疑問に思いました。すべての子どもの教育をどのように日本で保障していくかという議論でなく、日本語がわかるかわからないかで議論されてしまっているのです。そのようなこともあって、大阪外国語大学を卒業した後に隣の大阪大学大学院に入学し、国際協力という視点で外国人の子どもの教育を考えていくことをしました。神戸では事務局長という立場で活動を続けながら、大阪大学に通いました。

なんとか学校に行っていない子どもの問題を解決したいと考えました。私が今見ている学校に行ってない子どもたちというのは社会からも数字からも全く見えない子どもたちです。行政から見えないわけです。

大学院に入学して、研究者の文献をたくさん読みました。でも、日本に暮らす外国人の子どもにかかわる不就学のことを扱った研究者や論文はまったくありませんでした。不就学の子どもの問題を考える基礎研究がなかったのです。そのため、自分がやるしかないと決めました。調査方法として、全部の家庭を回り、全部自分の足で回り、そして全部の子どもに会って、この子は学校に行っている、行っていないということを把握する、そのよ

活動の概要

小島祥美

〈活動のきっかけ〉

現在私は、愛知淑徳大学の教員という立場で、外国にルーツを持つ子どもにかかわる活動を行っています。20歳の時に埼玉県内にある公立小学校の教壇に初めて立ち、外国人児童と出会ったことが、活動の原点です（1994年4月～1996年3月）。

東京都内にあるミッション系の小中高校で育ち、同級生には本名を堂々と名乗る在日コリアンの友達も多く、在日コリアンの先生もいらっしゃいました。社会や宗教（聖書）の授業では、朝鮮半島と日本の関係についての歴史的な経緯ついて学ぶことや平和を考える時間も多くありました。そうした環境で育ったことも関係しているのでしょうか、東南アジアや南米にルーツを持つ児童との公立小学校での生活は、驚きと衝撃の連続でした。

〈活動の経緯〉

仕事をしながら再度受験勉強をし、1996年4月、大阪外国語大学中南米地域文化学科（夜間主）に入学しました。そして、神戸市内で阪神淡路大震災の被災外国人にかかわるボランティア活動に参加しました。1998年には、神戸で出会った仲間たちと外国人の子どもをサポートするNPO団体を立ち上げ（NPO法人たかとりコミュニティ内、事務局長）、コミュニティビジネス（多言語センターFACIL）にも参画しました（～2003年3月まで）。こうした活動のなかで、学校に行っていない子どもと出会ったことが大きな転機となり、不就学にかかわる研究をはじめました（大阪大学大学院へ進学）。

2003年4月に岐阜県可児市に転居し、可児市・市教委・可児市国際交流協会（民間団体）・岐阜県・県教委・県国際センターと協働し、市内に暮らす全ての外国籍の子ども（小1～中3年齢者）を対象にした就学実態調査に挑みました（～2005年3月）。日本で初めて外国人の就学実態が明らかになった調査研究の結果、可児市長から「不就学ゼロ宣言」が出され、2005年4月には、不就学ゼロをめざす「外国人児童生徒学習保障事業」が同市でスタートしました。私は初代外国人児童生徒コーディネーターとなり（可児市教委所属）、調査時に育んだ行政・民間団体・研究者との「協働」を「連携」に応用し、さまざまな取り組みを行いました。1年後の2006年3月には、関係者のご尽力により、皆が祈願した不就学ゼロの街となったのです。

〈現在の主な活動〉

現在は東海地域を中心に、外国人学校の法的位置づけの改善、就学前の子どもへの支援（プレスクール事業）などを行っています。今回の報告では、2007年からはじめた外国にルーツを持つ子どもたちが夢と自信を持つことができるような自己発見をめざした活動「フォトストーリー」をご紹介します。子ども達の作品から問題提議をしたいと思います。

うな研究ができないかと考えていました。

協力していただける市町村を探すために、神戸の活動で築いたネットワークを生かし、各地にお願いに行きましたが、どこへ行っても断られました。

その時に、「岐阜県可児市」という街に出会いました。2002年のことです。可児市に初めて行ったときに、市や県の担当者、地域で活動する国際交流協会など、各関係者の皆さんに集まっていただき、可児市の市役所の一室をお借りしてプレゼンテーションをしました。自分がしたいこと、なぜそれをやろうと思ったのかということをお話しました。「大阪から来る子が何をしゃべるのだろう」というような興味津々のなか、私も緊張しながらお話しました。その話が終わったときに可児市の担当者から、「小島さんが言うことを全面的に協力しましょう」といって手を差し伸べてくれたの

です。本当に嬉しかったです。そのお返事を聞いて、神戸で活動していた仲間たちに理由を話し、すぐに私は可児市に引っ越しをしました。

2003年4月、市ができること、行政ができること、地域ができること、私のような大学院生ができること、そしてお互いの力を合わせて、全くわからない外国人の子どもたちの就学実態を把握し、解決に向けて取り組んでいこうという挑戦が始まりました。

結局私は可児市には4年住むことになるのですけれども、神戸の活動もやめてしまいましたので、収入がなく、私はいつもおなかがすいていました。そのことが調査でもその後の活動でもとても生きました。外国人住民たちのなかで、口コミで広がったのですね。全家庭を一軒一軒訪問しながら就学実態調査を行いましたが、訪問するとどの家庭もご飯をつくってくれるのですよ。「あなた、おなかすいてるのでしょう」と、ブラジルの家庭ではブラジル料理、ペルーの家庭ではペルー料理と…協力していただきながら私も調査を実施することができました。

全家庭を訪問しますので、子どもの就学実態の話だけではなくて相談活動も一緒にしました。神戸にいたとき、私は多言語による情報提供や相談活動を行っていましたので、その時の情報やネットワークもフルに生かしました。ですので、神戸のNGO仲間たちからは、「最近岐阜からの相談がめちゃめちゃ多いんだよね」と当時言われました。そうした多くの方々の協力により、外国人家庭の方たちからも大変信頼を得ることができ、全家庭訪問調査が実施出来ました。

可児市は総人口約10万人で、当時は外国人住民が約5,000人、20人に1人というのが外国人住民の状況でした。調査では、日本の小学1年生から中学3年生に相当するすべての外国人の家庭を訪問し、就学実態を把握しました。期間を2年間とし、同じ調査を3回実施しました。そうすることで、人の移動や就学の変化を比較したかったからです。そしてついに就学実態が日本で初めて明らかになりました。

この調査の話をするとたくさんあるので長くなってしまうので、内容は省略し、調査後の取り組みについてのみ、ここではお話します。

明確な調査結果により、可児市は動いたのです。私が全部回り、そして全貌が明らかになりました。可児市も明確な調査結果を基に、施策として「不就学ゼロ」をめざした取り組みがスタートしました。とりわけ調査では協働という形でしましたので、協働から連携とい

う形で実践できるような仕組みを幾つか、調査から見えたこととして、可児市には提言を出しました。私はいくつか提案したのですけれども、この連携をしていくためには、いわゆるソーシャルワーカー的な職業として、コーディネーターが必要だという話をしたのです。そうしましたら、市教委から強いラブコールをいただきました。そして話し合いの末、可児市教育委員会学校教育課に私が配属されることとなり、2005年4月から初代・外国人児童生徒コーディネーターを務めました。大阪大学大学院に在籍しながらでした。

この不就学ゼロをめざした取り組みとあわせて、市や県からの提言などにより、文部科学省では外国人の子どもを対象にした不就学実態調査というものが事業化されます。また可児市ではその後さまざまな事業を行っていくのですけども、その実践が今では文部科学省の事業になっています。可児市が行った実践が、ざまざまな形で全国展開されていくようになりました。

2005年度の当時、不就学ゼロをめざして私自身が考えられるあらゆることを実践しました。地域が、学校が、関係者が、みんなが頑張ればやはりできるのです。たった1年間ですけれども実践の結果、2006年3月には本当に不就学がなくなったのです。当時は日本の学校をやめる外国人児童生徒、とりわけ中学校をやめていく子どもたちが不就学となり、本当に多かったのです。そうした子どもたちをどうしていったらいいのか。学校施策について、校長先生、教育委員会関係者など

鵜の目

可児市教育委員会で、外国人児童生徒の教育コーディネーターとして勤務してきた女性職員が退職した。九月からは、名古屋市の愛知淑徳大学で教員として働いている。

彼女は三年半前に関西から可児に来た。当時は市職員ではなく大学院生の身分で、外国人の「不就学」について調査していた。国内で初めて実施された外国人の教育問題の本格的調査で、結果は本紙でも報じた。

彼女が来てから、可児市は変わった。多くの人が外国人の教育問題に興味を持ち、改革に乗り出した。語学指導や適応指導をするためのプレスクールを設置し、外国人登録に来た人は市教委の窓口に導かれ、学校の制度について学べるようになった。外国人教育の先進地として、全国から視察が相次いでいる。

「大学院生」が、十万都市の行政を動かす原動力になるさまは取材していて圧巻だった。

別れ際の言葉は「勉強したいブラジル人の若者は多い。大学で働いたら進学させられるかも」。心からエールを送りたい。

別れ　（田中　篤至）

①中日新聞（2006年9月4日）

関係者みんなで考えました。その結果が不就学ゼロ、中学卒業する子たちから高校進学する子たちが出てきているという形になりました。今では高校進学することが日常化する街へとなりました。

さまざまな実践を行うなかで、可児市に暮らす子どもたちはハッピーになりました。でも、可児市だけがハッピーになってはいけないと思いました。それで、可児市を離れることを決めました。

お手元の資料のなかにある新聞記事、中日新聞コラム「別れ」という記事ですが、私が可児市に暮らした4年間を継続して応援してくれた中日新聞の田中記者が書いてくださったものです。彼が最後のメッセージとして、私には全く何も言わずそっと。中日新聞に掲載してあることを地域の人から聞いて知りまし

た。色々な人たちの協力によって私はたくさんの学びをいただいたこと、そして実践できたことが、この記事からわかってもらえると思い、ご紹介します。

現在は大学教員という立場で、外国人の子どもが多く暮らす各地のお手伝いをしています。現在取り組んでいることについて以下お話ししたいと思います。

「子どもたちに自信と元気を持つことができる取り組み」について、主に活動しています。自分を見つめて将来の夢を語ること、そのことが子どもたちの自信につながるということを可児市でも学びましたので、具体的な実践として例えば、大学のオープンキャンパスに地元の外国人の子どもたちを招待し、進路を考える場づくりを行っています。また、映像づくりというのも行っています。お手元にある新聞記事のほうをあわせてご覧ください。

（ビデオ放映）

1作品目は、「自分が3人いたらいいのにな」と出生地であるブラジルも今を生きる日本も大好きという思いを描いた中学3年生の女の子の作品でした。そして2作品目は、日本で生まれて、その後ブラジルに行き、そしてその後にペルーに行き、また日本に来てと、11歳でありながらその間で何度も移動し、色々な国をまたぎながら生きている中学1年生の男の子の作品でした。いずれも素直な子どもの気持ちがわかる作品ではないかと思います。

こうした子どもたちが私たちの地域にいること、そのなかで私たち一人ひとりに何かできるのかを再度問題提起して、終わりにしたいと思います。

大学生☆　2010年（平成22年）7月27日（火曜日）

中日新聞

学生 街ガイ ダンス

大学への理解深める

外国人向けオープンキャンパス

愛知淑徳大4年　加藤　亜寿美

六月上旬、名古屋市の愛知淑徳大星ケ丘キャンパスで、東海地方で暮らす外国人の小中高生とその親らに向けて大学の様子を紹介する「オープンキャンパス」を開きました。ブラジルやペルー、中国、フィリピン出身の人たち計五十四人が参加してくれました。

オープンキャンパスは愛知淑徳大の体験教育科目の一環です。授業を担当する小島祥美講師が「外国の子どもたちに、大学では好きな科目を学び、専門知識を得られる」と説明。「ゲームを行い、日本語にとらわれない交流をことをきっかけに、受験を目指す。一カ月前から準備しました。

当日はジェスチャーえてほしい」と話した

東海地方で暮らす外国人の小中高生らが集まったオープンキャンパス＝名古屋市の愛知淑徳大で

講する学生が企画と運

図ったとで、入試や奨学金制度、卒業後の進路などを説明。愛知淑徳大の外国人の在学生と卒業生のインタビュービデオを見て理解を深めてもらったほか、クイズを交えて学内の案内も行いました。

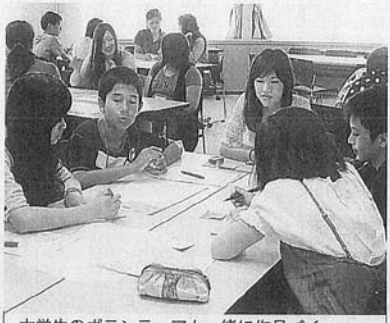
参加者から「大学に進学したいと思った」「先生になりたいので頑張りたい」との声が寄せられました。日本で暮らす外国人の子どもたちにとって新たな道を見つける機会がもっと増えて欲しいと願います。

②中日新聞（2010年7月27日）

日本で暮らす外国人の子に自信を

異国の悩み・夢 写真に刻む

異国の日本で不安を感じながら暮らす子どもは多い。そんな子どもたちに、写真を使って自分を紹介する映像作品をつくってもらい、会場で上映する試みを28日、名古屋国際センター（名古屋市中村区）が開催する。「これまでの自分を見つめ直し、将来の夢を語ることが、子どもの自信につながる」。そんな発想で取り組んだ、ユニークな企画だ。（黄澈）



大学生のボランティアと一緒に作品づくりに取り組む、外国人の子どもたち＝名古屋国際センター、小島祥美さん提供

名古屋国際センター、28日上映

「地域で理解深めて」

家族との会食、日本の保育園での運動会、ブラジルの海岸の風景――。数々の思い出の写真が映し出されていく。名古屋市に住む日系ブラジル人男子(12)の作品だ。本人のナレーションが重なる。

「僕は日本で生まれたけれど、6歳からブラジルとペルーで暮らした。また日本に戻ってきたけれど、言葉ができず、とても不安でした」

中学3年生の女子生徒の作品には、手作りのケーキの写真が次々と登場した。「いつかブラジルで、おしゃれなケーキ屋さんを開きたい」

企画の中心になったのは、外国人の教育問題を研究する、愛知淑徳大講師の小島祥美さん(36)たち。南米出身を中心に、東海3県には30万人を超す外国人が暮らしているが、不況で親が失業したり、言葉が理解できなかったりして悩む子どもは多い。

小島さんは「人に悩みを話せば、心が安らぐ。未来の自分を語れば、希望がわく」と考え、自分を表現する方法として、写真を使った映像作品を思いついた。パソコンに取り込んだ写真やイラストを編集ソフトでつなぎ合わせ、ナレーションを吹き込む。

2008年に岐阜県可児市で発表会を開いたところ、評判になり、09年は三重県松阪市と広島県呉市で実施。今年は名古屋国際センターが小島さんに協力を依頼した。

愛知県内の大学生20人がボランティアとして協力。今月6、7日、同センターでブラジル、コロンビア、ペルー、中国、イランと日本人のハーフら14人の子どもが作品づくりをした。

初日は、大学生が子どもとペアを組み、「日本で困ったこと」や「我が家の自慢」といった話題で自由に会話した。その中で、これまでに体験した興味深いエピソードや、将来の夢などの話題を五つほど選んだ。2日目は、話題に合わせて使えそうな写真を持って来てもらい、パソコンを使って作品に仕上げた。

作品を見て子どもの気持ちを知り、驚く保護者もいた。宮川馨交流協力課長は「地域の日本人にも見てもらい、理解を深めてほしい」。

公開講座「わたしのフォトストーリー」は28日午前9時半、同センター5階第1会議室で。問い合わせは同課（052・581・5689）へ。

作品の一部は、名古屋市の外国人集住地区「九番団地」（港区九番町1丁目）で21～22日にある「九番まつり」でも上映する。

③朝日新聞夕刊（2010年8月19日）